－所蔵作品紹介－

戸谷　成雄　TOYA Shigeo

山津波

やまつなみ

作品データはこちら

長野県小川村に生まれ、愛知県立芸術大学で彫刻を学んだ戸谷成雄は、現代日本の彫刻家のなかでも、最もエキサイティングな仕事を展開する一人である。美術における表現の幅が飛躍的に拡張し、「彫り刻む」というあからさまな響きをもつ「彫刻」の概念が最も退行を余儀なくされた1970年代に、戸谷は彫刻家としての仕事をスタートさせた。そうした時代に、彼はあえて「彫る」という行為を根本から問い直し、それを新たな視点から押し進めたのである。80年代からは、木の表面をチェンソーで荒々しく切り刻んだ〈森〉シリーズによって、他に類を見ない強靱な造形をうち立て、国内外でめざましい活躍を続けている。

この作品においても、角材をチェンソーで刻み、バーナーで焼き、その灰とアクリル絵具を混ぜて着色するという独自の技法が用いられている。「山津波」とは、大規模な山崩れをさす言葉である。角材の表面の、傷口のような刻み目からは、まるで滲み出す体液のように絵具が滴っている。波打つような彫痕が広がり、やがてそれは荒れ狂い咆哮する嵐のような猛々しさで、作品の表面を覆い尽くす。タイトルからも連想される通り、こうした表現は、自然の内部にうごめく強大なエネルギーの発露を思わせる。山村に生まれ育った戸谷にとって、それは身体の奥深く記憶された根源的なイメージであり、それを彫り出す行為はとりもなおさず、自らの存在そのものを掘り起こし、確認する行為であるのかもしれない。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より